

平成 2 2 年度研究について

香川県小学校教育研究会国語部会

1 平成 2 2 年度研究主題設定とその背景

昨年度、「活動あって学びなし」の授業にならぬよう、子どもが身に付けるべき知識・技能を明確にし、研究を進めた。この点においては、多くの先生方にその重要性を認識していただけたと感じている。例えば、夏季研修会でご提案いただいた「ことばあそびうたをつくろう」（第 1 学年）実践においてである。ここでは、言葉から連想を広げるために「形」や「色」「音」など必要な視点を明確にして実践にあたった。そうすることで、子どもたちの学びを保障することができたのである。

ところが、そのように「知識・技能の明確化」において研究の成果が見られた反面、「言語活動の教材化」においては、実践化の視点が捉えにくいという課題が残った。「言語活動を単元の中に設定する際のポイントは」「日常生活につながる言語活動とするための留意点は」等、言語活動について、さらに追究していく必要がある。

そこで、本年度は、言語活動の在り方についてさらに追究すべく、研究主題を次のように設定した。

基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、活用する学習の構築（2 年次）
- 知識・技能の明確化と、目的意識をもった言語活動の単元化 -

それでは、以下、サブテーマにある「知識・技能の明確化」と「目的意識をもった言語活動の設定」の 2 点から研究主題設定の背景を述べていく。

（1）知識・技能の明確化

これまで、ややもすれば、「～をまとめなさい。」「～の気持ちを想像してごらん。」のような活動指示に終わり、そうするための基礎的・基本的な知識及び技能を十分に教えていないことがあった。そのため、説明的な文章にしる文学的な文章にしる、その内容の読み取りがねらいのようになり、国語科としてどのような力が必要なのかが曖昧なまま終わってしまうことも多かったのではないだろうか。私たちが実践にあたる際には、身に付けさせたい知識・技能を明確にもっておかなければならない。

そのような視点で新学習指導要領の総則を読むと、知識・技能の明確化を図る際、次のような留意点が明示されていることに気付く。

... 創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、...
(「小学校学習指導要領 総則 第 1 教育課程編成の一般方針 1」より)

ここに示されているように、基礎的・基本的な知識及び技能の習得は、思考力、判断力、表現力等の育成の土台を支えている。ここが揺らいでしまつては、また、「活動あって学びなし」の学習に陥ることも懸念される。

すなわち、「知識・技能の明確化」を図るためには、それを活用することで、どのような思考力、判断力、表現力等を育てようとするのか、その思考力等を育てるにあたり、身に付けさせるべき知識・技能は適切なものとなっているか、それを見据えることが求められているのである。

(2) 目的意識をもった言語活動の単元化

目的意識について

言語活動に関して新学習指導要領解説に次のように示されている。

…基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることに資するよう、実生活の様々な場面における言語活動を具体的に内容に示す。

(「小学校学習指導要領解説 国語編 第1章総説 2 国語科改訂の趣旨」より)

国語科の学習において、閉じた教材の中で知識・技能を学ばせるにとどまらず、学習者の主体的な言語活動を授業場面に取り入れていくことが必要である。そうすることによって、知識・技能が活用され、生きて働くものとなるのである。

冒頭に述べたように、昨年度の研究を通し、基礎的・基本的な知識及び技能については、しだいに明らかにされてきた。さらに本年度、活用の中としての言語活動に目的意識をもたせることを重視する。

基礎的・基本的な知識及び技能を習得しさえすれば、それが豊かな言語活動につながり、よき言語生活者となる、という考えは、短絡的である。むしろ、目的をもった言語活動を通して基礎的・基本的な知識及び技能の必要性を感じ、習得に向かうという流れを大切にしたい。

単元化について

言語活動の単元化により、上に述べた「目的」意識をもたせるとともに、「国語への関心・意欲・態度」を育むようにする。この単元化の意義について、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(2004.2)が示している。

国語教育の在り方を考える場合の根本的な問題として、日本人の多くが言葉の力を信じていないという指摘がある。言葉によって物事が変わり、また、変えていくことができるという言葉への信頼を学校教育の中だけでなく、社会全体で教えていくことが大切である。

言葉への信頼は、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させることではない。あるいは、漫然と言語活動を行ったところで、それらを養えるはずもない。目的をもった言語活動の中で、知識・技能を活用し、それらが生きて働いたのだという実感があってこそ、言葉への信頼感が生まれてくるのである。

このような学習を組織するためには、1つの題材で閉じる学習では弱い。言語生活とつなぐ必要がどうしても生まれてくる。すなわち「単元化」である。単元学習成立の条件として「学習のめあてが学習者の興味・関心・必要に立脚していること、学習を通して学習者の現在および将来に必要な生きる力、学ぶ力がつくこと、聞く・話す・読む・書くなどの言語経験(活動)を通してことばの力がつくこと」ということが挙げられるが、ここに新学習指導要領の趣旨をも見取ることができる。新学習指導要領の理念や内容は、単元学習の理念や内容と重なる部分が多いのである。

2 研究の視点

それでは、「知識・技能の明確化と目的ある言語活動の単元化」を追究していく際、どのような視点をもって研究にあたればよいのだろうか。昨年度の課題を振り返りながら考えてみる。

(1) 「知識・技能の明確化」を図る際の視点

発達の段階を捉えること

本年度も、まず新学習指導要領を基に、その学年で身に付けさせたい知識・技能、そして育てたい思考力等を明確にして実践にあたってほしい。

例えば、1年生「はるの ゆきだるま」で「場面の様子と登場人物の行動から想像を広げる力（思考力）」を育てたいとすれば、そのためにはどんな知識・技能が必要となってくるかを考えるのである。そこでは、「さし絵とことばから想像する」「会話と行動をつないで想像する」という知識・技能が大切になるかもしれない。そして、さらに2年生の「ニャーゴ」で「どのように行動しているかを読み取る」という知識・技能が加わったりするのである（「大きなねこが、手をふり上げて立っていました。」「できるだけこわいからおでさけびました。」「小さな声でこたえました。」など）。

また、別の例で言えば、「ごんぎつね」で「視点」という知識を子どもたちに捉えさせようとするならば、「夏のわすれもの」で、「語り手」をおさえおくことが重要になるだろう。

このように、発達の段階を捉え、今、この単元ではどのような力を付けさせたいのか、そのためには、どのような知識や技能を身に付けさせておかなければならないのかを明確にして実践を考えていくことが大切である。

子どもに「知識・技能」を意識させること

昨年度、子どもに身に付けさせたい「知識・技能」を明確にもって実践にあたることで、子どもから「最初はできなかったことができるようになった。」という声が挙がるようになった。本年度はさらに歩を進め、子どもたちにも、学習内容である「知識・技能」を意識させたい。つまり、「こういう考え方を使ったから、学習問題が解決できたんだ。」「物語の構成を知っておくと、こういう時に役立つのだな。」と、その知識・技能の有用性を実感させるようにするのである。教師は、そういった振り返りの場を学習過程の中のしかるべきところに位置付けておかなければならない。

さらに、学習指導においては、その知識・技能を覚えさせるのではなく、それを考えさせることを重視したい。「書くこと」で言えば、書き方を覚えるのではなく、書き方を考えていく姿勢を学ぶようにするのである。形式的に学ぶのではなく、自分の思いや考えをどう表現するのかを耕していきたい。

何のためにこの学習をしているのか。今、学んでいることが、どのような場で生きるのか。そして実際どのように役に立ったのか。子どもたちがそのような学習経験を積み重ねることが、香川の子どもたちの「国語への関心・意欲・態度」を高めることにもつながるのではないだろうか。

(2) 「目的意識をもった言語活動の単元化」を図る際の視点

単元学習について倉澤栄吉氏は次のように指摘する。

国語単元学習とは何かという問いは、永遠のアポリア（難問）だが、ガイネンから説き出すよりむしろ、子どもの言語生活とは何かという問題から説き起こすべきである。

（倉澤栄吉『解説国語単元学習』1993，東洋館出版社）

昨年度の実践報告からは、習得すべき知識・技能を明確にして言語活動に向かった結果、子どもたちは学習を遂行できたものの、どの子も同じような表現になってしまったという反省点も見られた。おそらく、「私は、このことを伝えたい。」という目的意識が薄かったためにこのような結果になってしまったのだろう。

この課題を克服するためにも、まず、子どもの思いから学習を出発させたい。言語活動への子どもの思いを醸成した上で、「自分の思いを伝えるにはどうすればよいか」という意識の流れを経て知識・技能の価値を捉えさせていくという方向性を大切にする。子どもの興味・関心・必要に立脚し、言語活動を通して基礎的・基本的な知識及び技能が習得される学習、それが単元学習なのである。

それでは、子どもの思いを大切にするためには、どのような点に留意すればよいのか。以下にその視点を示す。

子どもの思いに働く教材開発

子どもの思いを大切にするということは、子ども任せということではない。子どもの思いが言語活動を誘発するような働きかけが必要である。

そのための方法としては、比べ読みや重ね読みなど複数教材を活用したり、子どものふだんの生活や興味・関心、あるいは他教科との関連から教材を開発したりすることなども有効であろう。

また、発達の段階も考慮する必要がある。

一例として「読むこと」において考えてみる。低学年では、一教材に重点をおいた学習が主となるだろう。そして、そこからある言語活動に向かう（例えば「音読劇」）という単元構想もある。それが中・高学年に移るにつれ、2つの作品の比較、複数の教材の比較という発展性をもつようになるだろう。その比較の際も、部分的な比較から全文を通しての比較などの発展性も考えられる。

今後、教材開発の「方法」「発達の段階」の観点を踏まえた実践提案を期待する。

言語活動の種類や特徴を明確にすること

単元で育てたい力を子どものものにするために、どのような言語活動が適切かを吟味して実践にあたることが大切である。物語を読んでポスターを作るのなら、それにより、他の言語活動にはない効力がなければならないのである。

また、その言語活動の特徴を明らかにして指導することで、他の場面への転移・活用が可能になる。

例えば、説明的文章では、一般的にははじめ・中・終わりの構成があることを指導する。しかし、それだけでは活用に向かうに不十分である。観察記録文であれば「はじめ：観察の対象」「中：本論事実の記述」「終わり：結果の考察」、同様に調査報告文では「目的や方法」「調査

経過」「結果の考察」、意見文だと「課題提示」「考え・事例」「結論」という特徴をもつことを、一つのモデルとして指導するのである。そうすることで、次に同じ種類の文章を書こうとする際、ここでの学びが活用できるようになるのである。

子どもの見取りを学習指導に生かすこと

単元構成の段階で子どもの思いを生かすことについて で述べた。さらに、学習指導の際も、常に子どもの姿を出発点としたい。子どもは、どのような認識をもって授業に臨んでいるのか。授業を通し子どもはどのように変容しているのか。それぞれが、どの程度「知識・技能」を習得しているのか。その「知識・技能」を活用して課題解決にあたらうとしているのか。そのような見取りを継続することで、子どもが見えてくる。すると、教師はどのような働きかけをすればよいのかがより明確になってくるのである。座席表の活用もその一方法である。上田薫氏は、「カルテ」として座席表に継続して記録し、子どもを全人的に捉えることの有効性を説いている。参考にされたい。

以上、「知識・技能の明確化」と「目的意識をもった言語活動の単元化」から、本年度の研究の視点について述べてきた。「知識・技能の明確化」は系統主義的な視点である。「目的意識をもった言語活動の単元化」は経験主義的な視点である。昨年度まで主張してきた「経験主義と系統主義の止揚」をさらに具現化すべく、本年度の研究を進めていきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』2008
- ・水戸部修治『「言語活動の充実」を基点とした国語科の授業づくり』2010，
香川大学教育学部附属坂出小学校第93回教育研究発表会分科会講演より
- ・安彦忠彦『小学校学習指導要領の解説と展開国語編』2008，教育出版
- ・寺井正憲『言語活動の充実，あるいは人を育てるということ』2009.4,月刊国語教育研究（東洋館出版社）
- ・桑原隆『言語活動の充実 - 「意味」の創造過程 - 』同上
- ・河野順子『自己・他者関係と「存在証明としての言葉」からコミュニケーション能力の育成を捉える』同上
- ・宮本浩子『発達に即した読むことの単元を構想し，展開する - 「読むこと」の指導内容の系統を見据えて - 』同上
- ・倉澤栄吉『解説国語単元学習』1993，東洋館出版社
- ・日本国語教育学会『国語単元学習の新展開 中学校編』1992，東洋館出版社
- ・上田薫『人間のための教育』1990，国土社